

奈良・平城京跡

- 1 所在地 奈良市北新町
 - 2 調査期間 一九九二年(平4)七月～八月、二一九九二年一〇月、三一九九二年一月
 - 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
 - 4 調査担当者 代表 町田 章
 - 5 遺跡の種類 都城跡
 - 6 遺跡の年代 奈良時代
 - 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
- 一 第二三〇次調査

駐車場造成に伴う発掘調査で、平城宮の南に接する左京三条一坊十・十五・十六坪にかかる地域である。四本のトレンチを設定して計約一七〇〇㎡を調査した。

その結果、十五・十六坪の間には三条条間小路が存在せず、両坪が奈良時代を通じて一体の敷地として利用されたことが明らかになった。但し、両坪の間には東西中軸線上に門を開く築地塀があり、南北二つの区画に分けて利用されていたと見られる。十五坪の中心部では、三棟の大型東西棟建物の東西に南北棟建物を配するという、京内の宅地だけでなく、宮内でも例を見ない配置が奈良時代を通じ

て続いている。これらはいずれも当初の掘立柱建物を後に礎石建物に建て替えている。また十六坪では二間×七間の身舎の四面に庇が付く極めて格の高い建物が建てられ、京内では最大規模の井戸SE〇六が設けられている。SE〇六は一辺が約一・八mの蒸籠組の井戸で、従来京内で最大であった長屋王邸の井戸SE四五八〇の一辺一・三五mよりはるかに大きい。横板は七段(一段の高さは二四・五×二六・〇cm)が現存する。深さは約三mである。掘形および井戸枠内埋土出土の土器の年代から、奈良時代後半に掘られ、長岡遷都以後に廃絶したものと考えられる。なお、井戸枠内埋土から奈良時代末期の軒丸瓦も出土しており、その他、木製品としては齋串・曲物がある。

一方、十坪と十五坪の間では、東一坊坊間東小路を検出しており、十坪は十五・十六坪とは別の区画であったことが明らかになった。十坪東辺では井戸SE三六を検出している。SE三六は、一辺が約六mの隅丸方形の掘形をもち、枠木は全て抜き取られ、土坑状を呈する。井戸枠抜取穴からは平城宮出土土器編年のⅡ期(七一六～七三〇年頃)の土器が出土している。

木簡は井戸SE〇六の井戸枠内から一点、井戸SE三六の抜取穴から五点が出土した。

十五・十六坪は、その建物配置だけでなく、宮内の埴積み基壇官衙と同一型式の軒瓦が全軒瓦の四分の一を占めること、埴が多数出

土していること、「内匠寮」という官司名の書かれた木簡が出土したことなど、遺物の点でも個人の邸宅とは考えにくく、宮外官衙の可能性が高い。一方、十坪については、「宅」と書かれた木簡が出土したことから見ても、個人の邸宅の可能性がある。

二 第二三四―九次調査

駐車場造成に伴う発掘調査で、5m×2.0mの東西トレンチを設定して調査を行ない、左京三条一坊十六坪東側の東一坊大路西側溝SD三九三五、および十六坪東端の区画施設の東雨落溝を検出した。

木簡は東一坊大路西側溝SD三九三五から出土した。SD三九三五は、約5m分を検出し、幅は検出面で6m、底で4m、深さ1.6mの断面逆台形の溝で、西岸に四〇～五〇cm大の河原石による護岸を持つ。埋土は上から暗灰褐色砂質土・暗灰色粘質土・暗褐色粘質土・暗灰色バラス土の四層に分かれる。木簡の出土は暗褐色粘質土層から一点、暗灰色バラス土層から七点（うち三点は削屑）の計八点である。共伴遺物としては、金製飾金具断片、和同開珎六點、神功開宝一点、帯金具四點、海老鏡一点、鉄釘二点などがあり、また護岸石列の南端で籌木と思われる木製品がまとも出土している。最下層の暗灰色バラス土層からも奈良時代後半の土器が出土しており、東一坊大路西側溝は奈良時代を通じて溝としての機能を保っていたものと考えられる。

三 第二三四―一〇次調査

駐車場造成に伴う発掘調査で、九〇㎡を調査した。位置は左京三条一坊十坪の西南部にあたる。奈良時代の蛇行する流路SD〇一（幅四～六m、深さ二m）、これと重複する井戸SE〇二などを検出した。SE〇二は、井戸掘形は九五cmの方形で、内側に八枚前後の薄い縦板を立てている。井戸底から須恵器横瓶・広口壺や籠状編物などとともに木簡七点が出土した。木簡はいずれも削屑である。SE〇二は遺物から細かい年代を限定できないが、SD〇一下層堆積のある時点で造られ、その上層と同時に廃絶している。SD〇一下層からは内面に放射暗文とらせん暗文をつける土師器杯Aが出土しており、平城ⅡからⅢ期（七三〇～七五〇年頃）の早い段階まで流路として使用されたようである。上層からは土師器椀Aが出土しており、平城Ⅲ期の中段階以降のある時点で埋められたものと考えられる。

8 木簡の積文・内容

一 第二三〇次調査

井戸SE〇六

(1) 「内匠寮」
〔匠カ〕

(61)×17×2 019*

井戸SE三六

(2) ・ ×枝宅車二両

〔赤染カ〕
□年六月廿一日□□□□

(159)×33×7 081*

(3) <蓮子巻斗>

(221)×23×2 031*

二 第二三四―九次調査

東一坊大路西側溝SD三九三五

(1) ・池万呂 □女



(36)×(10)×2 081

(1)は暗褐色粘質土層から出土したものである。人名を記すが、内容は不明である。

三 第二三四―一〇次調査

井戸SE02

(1) 西嶋

091

(2) 西

091

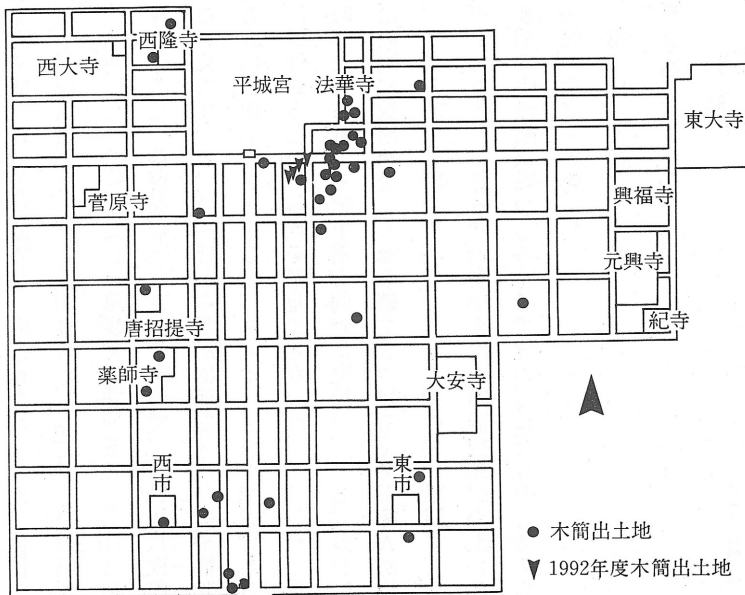
左京三条一坊十坪は平安京では神泉苑の位置にあたる。その位置で奈良時代の蛇行流路を検出し、池の存在を示唆する「西嶋」の木簡が出土したことは注目に値する。但し、一―(2)のように、某宅の存在を推定させる木簡も出土しており、今後左京三条一坊十坪の性格を検討していかねばならないであろう。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査出土木簡概報』二七(一九九三年)

同『一九九二年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九九三年)

(森 公章)



平城京木簡出土地点図